

トマス・アクィナス『マタイ福音書註解』抄訳

—山上の垂訓冒頭7つの至福の箇所—

Selected Translation of 'Super Evangelium S. Matthaei Lectura'

山口隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 旨

トマス・アクィナスの聖書註解は、いまだ十分に研究されていない分野である。しかしながら、トマスが中世の大学における神学部教授として聖職者を目指す学生の指導にあたっていたことを考えると、聖書の註解は神学者トマスの本務であったということが出来る。至福 *beatitudo* 概念は『神学大全』など主著とされる著作で体系的に論じられているが、そのような体系を背後に持つトマスが『マタイ福音書』5章のいわゆる山上の垂訓冒頭における7つの至福についてどのように論じているか、それを示すために、『マタイ福音書註解』403節から443節を以下に翻訳した。底本は *Super Evangelium S. Matthaei Lectura*, Marietti 1951 とした。

Key Words : 至福 真福八端 『マタイ福音書註解』

403. 一福音記者〔マタイ〕は、先立つ箇所[n.396]<sup>1</sup>で、キリストの教えの短い表題と言うべきものをおいた。今、教えそのものと、その効果を、すなわち、群衆の讃嘆をおく。

そして、熟考すべきことは、アウグスティヌスによれば、主によるこの説教に、わたしたちの生の完成全体が含まれている。そして、主が、〔群衆を〕引き込む目的を、すなわち、なんらかの保証を加えることで、証明している。そして、最大度に人間が欲しているのは、至福である。そこで、主はここで3つのことをする。

第1に、教えを受け容れる者たちにもたらされる報酬を約束する。

第2に、掟をおく。「わたしが律法を破棄するために来たと思ってはならない」云々とある個所である[n.456].

第3に、どのようにして、それらを守るようになることができるかを教える。「願え、そうすれば受け取る」と言われている箇所である[n.474].

第1のことに關して、主は2つのことをする。ある者たちはこの教えの遵守者であるにすぎないが、ある者たちは仕える者だからである。

それゆえに、〔福音記者マタイは〕、遵守する者たちの至福を描く[n.404-443]. 第2に、仕える者たち至福を描く。「あなたたちは悪く言われる時、至福である」とある個所である[n.444-464].

404. —ここで多くのことが至福についておかれているが、主の言葉に關して、誰も決して、主の示したことにいたるほど絶妙に語ることはできないということは、心にとめておかれたい。しかしながら、これらの言葉のうちに、十全なる至福すべてが含まれている。すなわち、人はみな、至福を欲するが、至福に關する判断はことなる。そしてそれゆえ、ある人はあのもの、別の人はこのものを欲する。

そして、われわれは至福について4とおりの意見を見出す。すなわち、あるものたちは、〔至福は〕外的なものにおいてのみ成り立つ、すなわち、この世的なもの〔時間的なもの〕があふれることだけがそれであると信じている。

「これらがある民が至福なのだ、と彼らは言った」(詩 143:15)。一別の者たちにとっては、完全な至福とは、人間がその意志を充足させることである。だから「思うとおりに生きるものは至福だ」と我々は言うのだ、と(コヘ 3:12)。

「そして、私は、喜ぶより良いことはないことを知っている」。一別の者たちは、完全な至福は活動的徳のうちにあると言う。一別の者たちにとっては、〔完全な至福は〕観想的徳にある。すなわち、神的で、知性の対象たるべきものに対する観想の徳のうちに。たとえば、アリストテレスの主張のように。

そして、これらの意見はすべて偽である。たとえ、同一の理由ではないにせよ。それゆえに、主はすべてに反証を与えているのである[n.405-409].

405. —外的なものにあふれていることが至福だと言う者たちの意見に反証す

べく、主は「至福だ、貧しい者は」と言う。すなわち、ものにあふれている人々は至福ではないと言わんばかりに。

406. —また、欲求の充足に至福を見る者たちの意見に反証するのは、「至福だ、あわれみ深い者たちは」と言う時である。

しかし、知っておくべきは、人間の欲求には3種類あるということである。  
①怒情的な欲求、すなわち、敵に報いることを求めるような欲求。そして、主はこれに反証を与えて言う。「至福だ、柔和な者は」。②欲情的な欲求、すなわち、喜び楽しむこと〔快樂の享受〕をよしとする欲求。これに反証を与えて、主はこう言う。「至福だ、悲しむ者は」。③意志の欲求、これには、求めるものが2種あるのに応じて、2種類ある。(1)どんな上位の法にも制約されていない意志、(2)他のものを従者として駆り立てることのでき、ゆえに、従属することではなく、優越することを欲する意志。そして、主は、それぞれに対して反対のものを示す。(1)の意志〔の充足が至福だ、という意見〕に対しては、「至福だ、義に餓え乾く者たちは」と言い、(2)の意志〔の充足が至福だ、という意見〕に対しては、「至福だ、あわれみ深い者たちは」と言う。それゆえに、至福を、外的なものがあふれることや、欲求の充足にあるとする者たちは間違っている。

407. —そして、至福を活動的生ではたらきにあるとする者たちも間違っているが、間違いの度合いは少ない。これは至福への道だからである。それゆえに、主は、悪に反証するだけでなく、至福への筋道となるものを示している。この世的〔時間的〕なことなどのように、自分自身に対する筋道をつけられるが、その目的は心の清さであり、感情に打ち勝つためにそうするのである。また他の人に対する筋道をつけられるが、かくて、その目的は平和、またはそれに類するものである。なぜなら、正義の業は平和だからである。そして、それゆえ、それらの徳は、至福への道であり、至福そのものではない。そして、このことが、「至福だ、心が清いなら。この人たちは神を見るだろう」ということである。〔主は〕「見ている」とは言わない。これは至福そのものだからである。そして、また、「至福だ、平和を作る者たちは」とある

が、「平和を作る者である」からではなく、他のものに向かっているがゆえに、  
「神の子と呼ばれるだろう」ということになる。

408. 一神の観想のうちに至福があると言う者たちの意見だが、主は、この世  
〔時間〕に関する限りで反証を与える。というのは、他の点に関しては真で  
あり、究極の幸福は、最善の知るべきもの、すなわち神を見ることにあるか  
らである。ゆえに、〔主は〕「見るだろう」と言う。

そして、注目されたいのは、哲学者〔アリストテレス〕によれば、観想の  
はたらきが至福にするものであるには、2つのことが必要である。(1)実体的  
な要件、すなわち、最高の知るべきものはたらきであること。すなわち、  
神の。(2)形相的な要件、すなわち、愛とよろこび。なぜなら、美によって青  
年期が完成するように、よろこびによって幸福は完成する。そして、それゆ  
え、主は2つのこと、「神を見るだろう」とことと「神の子と呼ばれるだろう」  
こととをおく。なぜなら、このことは、愛による合一に属することだからで  
ある。「見よ。御父がわたしたちにどれほどの愛を与えてきたか、わたしたち  
が神の子と名指され、また神の子であるようにと」(1ヨハ3:1)。

409. 一また、注目されたいのは、それらの至福のうちに、あるものは功德と  
しておかれ、あるものは報酬としておかれており、このことは各々について  
そうだということである。「至福だ、霊において貧しい者は」、さあ、これが  
功德だ。「天の国はその人たちのものだから」、さあ、これが報酬だ。他のも  
のもこんな感じである。

410. 一そして、注目されたいのは、功德一般に関してのことと、報酬一般に  
に関してのこととがあるということである。功德に関し知るべきことは、哲学  
者〔アリストテレス〕が、徳の2つの類を区別している。(1)通常の功德で、  
人間を人間のしかたで完成させる。(2)特別の功德で、英雄的と〔アリストテ  
レスは〕呼ぶ。人間のしかたを超えて〔人間を〕完成させる。恐れるべきも  
のあるところで勇者が恐れる時、それは徳であるが、恐れなければ、悪徳  
である。また、もし神の助けに信頼している者は何においても恐れないとす  
るなら、その徳は人間のしかたを超えている。そして、その徳は神的な徳と

呼ばれる。それゆえ、そのはたらきは完全である。そして徳もまた、哲学者〔アリストテレス〕によれば、完全な行為である。それゆえ、この功德は、あるいはたまものによるはたらきであり、あるいはたまものによって完全にされるという面で、徳によるはたらきである。

411. —また、注目されたいのは、徳によるはたらきが、法がそれについて命令するところのものどもであるということである。ところで、至福の功德となるのは、徳によるはたらきである。そして、それゆえ、命令され、そして下位のものに含まれているものはすべて、至福に関連している。それゆえに、モーセは、まず掟を示し、多くのことを、すなわち、その後に示された掟に関わることすべてを語ったのである。このようにして、キリストがまず、その教えのうちに約束した至福に、他のすべてのものが関連しているのである。

412. —そして、第1のことに關しては以下のことに注目されたい。神は、彼〔神〕に仕える者たちの報酬である。「主は私の一部だ、と私の靈魂は言った。それゆえに、私は彼を期待するだろう」(哀 3:24)。「主は私の相続の一部にして私の盃の一部である」(詩 15:5)。そして、アウグスティヌスが、『告白』2巻で言っているように、「靈魂はあなたから離れる時、あなたの外に善を求めている」。また、人間たちは、多くの分散したものを求めている。しかし、どのような生でもそこで見つけることができるものは、何であれすべて、主が神のうちで、保証したものである。すなわち、ある人々は、富の充溢を最高善とする。これ〔富の充溢〕によって、最大の尊厳に至ることができる。主は、どちらをも含む国を約束する。しかし、この国に至るために通るのは貧しさの道と言ひ、富の道とは言っていない。それゆえに、「至福だ、貧しい者たちは」。別の人たちは、戦争により名誉に至る。そして主は、「至福だ、柔和な者たちは」云々と言う。別の人たちは娛樂を通して慰めを求める。主は、「至福だ、悲しむ者たちは」と言う。ある人たちは、服従することを望まないが、主は言う。「至福だ、義に餓え乾く者たちは」。ある人々は、服従する者たちを抑えることで、惡を避けることを欲する。主は、「至福だ、あわれみ深い者たちは」云々と言う。ある人々は、神を見ることを、途上〔この世〕

での真理の観想のうちにおくが、主は、天国でのそれを約束する。それゆえに「至福だ、心が清いなら」云々とある。

413. —そして、主がここで触れている報酬は 2 とおりのしかたで有される。すなわち、(1)完全なしかたで有されるのは、天国でのみのことである。(2)手始めのものとして、不完全な仕方でする有されるのは、旅路〔この世〕でのことである。それゆえに、聖人たちは、彼らの至福の何らかの手始めを有している。そして、この世の生では、かのものを天国でそうなるだろうように、かのもの〔手始め〕は展開され得ない。それゆえ、アウグスティヌスは、〔聖人は〕この世の生でどのようにあるかを解釈している。それゆえに「至福だ、霊において貧しい者は」、すなわち、希望においてだけでなく、ものにおいても。「神の国はあなたたちの間にある」(ルカ 17:21)。

414. —それらの至福に関し、福音書記者〔マタイ〕は 2 つのことをなしている。第 1 には、至福そのものがおかれている。第 2 には、至福の証しがおかれている。それは、「至福だ、義のために迫害を被る者たちは。天の国はこの者たちのものなのだから」とある箇所でする [n.443]。すなわち、このことがすべての至福を宣明するものである。

徳は 3 つのことをなす。(1)悪から離れる。(2)善をなす、あるいは善をなすことをなす。(3)最善のものに対して準備する。

したがって、最初に(1)について決定する。それは、「至福だ、貧しい者たちは」の箇所である [n.415]。(2)については、「至福だ、餓える者たちは」の箇所である [n.426]。(3)については、「至福だ、心が清ければ」の箇所でする [n.433]。

ところで、徳は、3 つの悪から離れる。欲情、残酷あるいは不穏なこと、そして悪行による娯楽。

第 1 のもの〔欲情〕に注目されるのは、「至福だ、貧しい者たちは」の箇所である [n.415]。第 2 のもの〔残酷〕は、「至福だ、あわれみ深い者たちは」の箇所である [n.419]。第 3 のものは、「至福だ、悲しむ者たちは」の箇所である [n.422]。

415. —それゆえ、〔主は〕「至福だ、貧しい者たちは」と言う。2 通りのしかたで読まれる。

まず、「至福だ、貧しい者たちは」、すなわち、自身を貧しい者たちと見なしている謙遜な者たちは〔至福である〕。真に謙遜な者たちとは、外的なものに関してのみならず、内的なものに関しても、自身を貧しい者たちと見なしている者たちである。「わたしこそは乏しく、貧しい者」(詩 39:18)。これに反して、「あなたは私が金持ちだと言うが、あなたは、あなたがみじめで、あわれむべきであり、盲目で、裸であるということを知らない」云々。

そして、この時「霊において」と言っていることは、3 通りに読むことができる。すなわち、(1)霊は、時に、人間の傲慢さと言われる。「その霊が嗅覚にある人において安らげ。かの人は崇高な人と見なされる」(イザ 2:22)。「堅固な人たちの霊は、いわば壁を打ち倒す旋風である」(イザ 25:4)。そして、傲慢が霊と言われるのは、風によって革袋がふくらむようにという理由による。「おのれの肉の感覚にふくらまされた者」(コロ 2:18)。それゆえ、貧しい者たち、すなわち、傲慢の霊を少なく有している者たちは至福だということになる。—あるいは、霊は、人間の意志として受け取られる。すなわち、ある人々は、必然的に、謙遜である。そして、その人々は至福ではなく、謙遜を得ようと努める者たちである。—第3に、聖霊として受け取られる。それゆえに、「至福だ、霊において貧しい者たちは」と主がおっしゃっている。彼らが聖霊によって謙遜である者たちだからである。そして、それら2つは、言わば同一のものに帰る。そして、〔主が〕「霊において貧しい者たちは」と言うのは、謙遜さが聖霊を与えるからである。「貧しき小さい者を顧みるのでなければ、そして、霊において打ち砕かれた者を、また私の話に震える者を顧みるのでなければ、誰を顧みるのか」(イザ 66:2)。

そのような貧しき者たちに国が保証され、最高に卓越したものがそこで理解される。たとえ、それがどのような徳に報いられようとも、謙遜〔の徳〕に特に与えられる。というのは「おのれを低くする者はみな、高くされるだろう」(マタ 23:12)。「謙遜な霊を栄光において受ける」(箴 29:33)。

416. 一あるいは、ヒエロニムスによれば、霊において貧しい者たちとは、文字通り、時間的なもの〔この世的なもの〕の辞退という形で貧しい者たちである。そして、「霊において」と言う。というのは、ある人々は、必然によって貧しいが、そのために至福がなければならないということはない。至福がなければならないのは、意志によって貧しい人たちである。そして、この人たちは、2通りの意味でそう言われている。(1)たとえば、ある人々が富を有しているとしても、心で有しているのではないという意味。「もし富があふれようとも、心を添えようと思ってはならない」(詩 61:11)。ある人々は決して有さず、決して得ようと努めない。そして、このことはより平穩なものである。精神が霊的なものによって富から引き離されている。そして、その人たちは、本来的には、霊によって貧しい人々と言われる。たまもののはたらきは、人間のしかたを超えているので、人間に属する至福なるものである。そして、人間が、どのようなしかたでも欲するということがないように、すべての富を放棄することは、人間のしかたを超えている。

417. 一そして、この人たちに、天の国は保証されている。ここで注目されるのは、名誉の高さだけではなく、富があふれることである。「神は、この世で貧しく、信仰に富んでいる者たちを選ぶのではないか」(ヤコ 2:5)。

また、モーセが最初富を約束したことにも注目されたい。「あなたの神なる主はあなたを、地に去来するすべての民族のうちでより高くなさるだろう」(申 28:1)。そして「都市であなたは祝福され、田であなたは祝福される」(申 28:3)。そして、それゆえ、主は、旧法を新法から区別するために、最初に時間的な〔この世の〕富を軽蔑することに至福をおいている。

418. 一また、アウグスティヌスにならい、次のことに注目されたい。この至福は、恐れのだまものに関わっている。おそれは、すなわち、最大度に子的であるそれは、神への敬意をなす。そして、このことによって人間は富を軽蔑する。イザヤは、至福を下るしかたでおいている。「エッサイの根から枝が出、その根から花が登る。そして、彼の上に主の霊が安らぐだろう。知恵の霊、知性の霊、おもんばかりと勇気の霊、知識と敬虔さの霊が。そして、主

の恐れが彼を満たすだろう。キリストは、逆に、おそれのたまものから、すなわち、貧しさから〔始める〕。イザヤは、キリストが地に到来することを予告したが、キリストは地から上方へ引き上げたからである。

419. —「至福だ、柔和な者たちは」。これが第 2 の至福である。しかし、貧しさが至福に十分であると〔主が〕言わないように、〔貧しさだけでは〕十分でない、それどころか、怒りを抑える馴致が一欲望に対する節制のように一必要であることを示しているのである。すなわち、けっして苛立たない者は、柔和である。このことは、すなわち、正当な理由がある時でなければ怒らないということ、徳によって起き得るだろう。しかし、正当な理由があるにもかかわらず、声高に主張しないというのは、人間のしかたを超えている。そして、それゆえに、「至福だ、柔和な者たちは」と〔主は〕言う。なぜなら、争いは、外的なものの過剰さのゆえにあり、それゆえに、人間が富を得ようと努めないなら、混乱はなかっただろう。それゆえに、柔和でない者たちは、霊において貧しい者たちでない。そして、それに加えて、すぐに「至福だ、柔和な者たちは」と続いているのである。

そして、気づかれるべきは、このことは 2 つのことから成り立つ。第 1 には、人間が怒らなくなるということである。第 2 には、腹が立ったら、怒りを抑えるということである。そして、アンブロシウスは「思慮深い者には、怒りの運動を抑えることが属する。怒りを抑えることは、まったく怒らないことに比べて小さな徳とは言わない。すなわち、私は、またこの最も多くのものをより軽く、かのものをより強く評価する」云々と言う。

420. クリソストムスは言っている。「多くの永遠の約束の間に、1 つの地上的なものをおく」。それゆえに、字義的には、この地を所有するのは柔和な者たちである。なぜなら、多くの者が所有を求めて争い、しばしば命とすべてを滅ぼしてしまうが、穏やかなものは何もかも持っているということがある。「穏やかな者たちが地を受け継ぐ」(詩 36:11)。

しかし、未来のことについて言っているのだとするほうがよりうまい解釈だ。また、この時のことなら、多くのしかたで解釈され得る。ヒラリウスも

そう解釈している。「地を所有するだろう」、すなわち、キリストの栄光の体を。その体のうちで、彼らは、明るさ〔輝き〕に関して同じ形である。「王を、その飾りのうちに見るだろう。その目は、遠くから地を見分ける」(イザ 33:17)。「私たちの謙遜の体を、彼の輝き〔明るさ〕の体と同じ姿に作り直すだろう」。

あるいは、別のしかたで解釈される。この地は、死者の地であるに過ぎない。腐敗のもとにあるが、使徒によれば腐敗を免れているからである(ロマ 8:21)。それゆえに、その地は、明るくされ、腐敗の奴隷という立場から解放されている時、生者の地と呼ばれるだろう。あるいは、地は、浄火天と解される。そこには、至福者たちがいる。そして、これが地と呼ばれている。天に対する地の関係と、聖三位一体の天に対するこの天の関係は同じである。あるいは、「地を受け継ぐだろう」、すなわち、彼〔キリスト〕の栄光を与えられた体を。

アウグスティヌスは、比喩によって講解している。そして、これによって、第 1 の真理の認識に関する聖人たちの堅固さが解されるべきである。「わたしは、主に属する善なるものを、生者の地で見ると信じている」。

421. この 2 つ目の至福は、敬虔さのたまものに適応される。怒る人とは本来、神の秩序づけに満足していない人だからである。

422. 「至福だ、悲しむ人々は」云々。すでにおかれた 2 つの至福によって、欲望の悪、あるいは残酷の悪というものから我々が遠ざけられる。ここにおかれる 3 つ目の至福によって、我々は有害な娯楽や楽しみという悪から遠ざけられる。そして、これが「至福だ、悲しむ者たちは」ということである。

旧約のうちでは地上的なものを約束していた。そして、地上的な楽しみを約束していた。「主の善きものに、穀物、酒、油」など「の上で合流する」(エレ 31:17)。その前には、「乙女は輪舞の中で喜ぶだろう。同じく、若者も老人も」(エレ 31:13)とある。しかるに、反対に主は、至福を悲しみのうちにおいている。

気づかれるべきは、あらゆる泣くことが、悲しみとは言われ得るわけではないことである。しかし、死者を、自分にとって愛しい者として泣くことが

それである。なぜなら、主は、死去によってここで語るからである。先ほど、「至福だ、貧しい者たちは」と語ったように、ここでは、最大の悲しみについて言葉を語る。死者のことを泣く者たちは、どのような慰めも受け入れないように、主は私たちの命のことで悲しみのうちにあるよう欲している。「独り子のために嘆け、苦い嘆きを」云々(エレ 6:26)。

この悲しみは3通りのしかたで講解される。第1に、自分の罪のゆえだけではなく、他人の罪のゆえに、という意味で講解される。私たちが肉的な死者のことを悲しむなら、霊的な死者のことはなおのこと悲しむ。「サウル、いつまで悲しむのか」云々(王上 16:1)、「誰が私の頭に水を与え、私の目に涙の泉を与えるのだろう。そして、私は、昼も夜も、私の民の娘たちのために、殺された者のことを泣くだろう」(エレ 9:1)。この至福は、先行するものの後に、十分ふさわしく置かれている。なぜなら、以下のように言うことができるからである。悪をなさないだけで十分である。そして、始めから罪の前までは真である。しかし、罪を犯した後は、あなたが十分でない限り、事態は十分でない。一第2には、現在のみじめさがあることのゆえの悲しみについて受け取られ得る。「ああ、悲しや。私の滞在の長引いたのは」(詩 119:5)。これは、より上なる水浸しとより下なる水浸しである。このことについてはこうある。「罪のために泣け。天の祖国の滞在のためにも」一第3には、アウグスティヌスによれば、人間たちが、キリストのところに行く際捨てる世の喜びについて持つ悲しみのために、ということである。すなわち、人間たちは、世において死に、そして、世は彼らにおいて死ぬからである。「彼〔キリスト〕によって、世は私に対し十字架刑に処せられ、私は世にとって十字架刑に処せられた」(ガラ 6:14)。そして、私たちが死者たちについて悲しむように、かの人たちも悲しむ。捨てる際には、何らかの苦痛を感じないではいられないからである。

423. 3通りの悲しみには、3通りのなぐさめが対応している。罪のゆえの悲しみには、罪のゆるしが与えられる。ダヴィドはこう言っている。「わたしに、あなたの救いの喜びを私にもたらししてください」。(詩 50:14)。天の祖国が先

延ばしにされ、現在のみじめさが長く続くということに、永遠の生というなぐさめが対応する。これ「永遠の生というなぐさめ」についてはこうある。

「あなたたちの悲しみを、私は喜びへと反転させるだろう。そして、彼の苦痛から喜ばせる」(エレ 31:13)。そして、「エルサレムであなた方はなぐさめを受けるだろう」(イザ 66:13)。第 3 には、悲しみに対応するなぐさめは、神の愛というなぐさめである。すなわち、愛しているものを捨てることで悲しむ時、他の愛するものを手に入れるなら、なぐさめを受ける。そこで、人間たちは時間的なものの代わりに霊的な永遠のものを受け取る時、なぐさめられるということになる。すなわち、聖霊を受ける時。これが、パラクリトゥス〔パラクレートゥス〕と呼ばれるわけである(ヨハ 15:26)。すなわち、聖霊、すなわち、神の愛によって、人間たちは喜びを得ることになるだろう。「あなたたちの悲しみは喜びへと反転する」(ヨハ 2:16)。

424. そして、注目すべきは、この至福は、知識のたまものに固有のものだということである。悲しむ者たちとは、他者の惨めさを認識する者たちのことである。ここでは、そのような知識を持たない人々について論じられている。「無知による大きな戦いに生きるものたちの中に、かくも大きな悪が平和を呼ぶ」(知 14:22)。逆に、「知識を増す者は、労苦をも増す」(コヘ 1:18)。

425. また、注目すべきは、この報酬は、第 2 のものが第 1 のものの上に増すという仕方で秩序付けられてあるということである。すなわち、第 1 に「至福だ、貧しい者たちは、天の国はその人たちのものなのだから」と言ったあとで「その人たちは、地を所有するだろうから」、すなわち、単に持つよりも所有する方が優る。同じく、その後、「その人たちは、なぐさめられるだろうから」とある。すなわち、所有するよりなぐさめられる方が優る。なぜなら、この至福においては、何かを所有しながら、それらを楽しまないからである。

426. したがって、悪を取り除くことに関連する至福がおかれたうえで、ここに、善のはたらきに関連する至福がおかれる。そして、わたしたちの 2 種類の善がある。すなわち、義の善と、あわれみの善である。そして、それゆえ〔主は〕2 つのこと〔すなわち義の善に関する言葉とあわれみの善に関する

ことば]をおく。

427. 前者〔義の善〕に関して、〔主は〕「至福だ、義に餓え渴く者たちは」と言う。義は3通りにとられる。クリソストムスと哲学者〔アリストテレス〕がこうしている。すなわち、〔第1に〕すべての徳を指すために言われている。全ての徳は、法的正義と呼ばれる。これは徳の行いを命ずる正義である。そこで、人間は法を順守している限り、すべての徳のわざをまっとうしている。特殊的な徳としての正義、すなわち四枢要徳に属するそれ、吝嗇、あるいは不正と対立するそれとなると話は別で、それは〔すなわち第2の正義〕購買に関する正義、販売に関する正義、貸借に関する正義である。

それゆえ、ここで「義に餓える者たちは」と〔主が〕おっしゃっていることは、全般的な意味と、特殊的な意味とで解される。

一般的な意味について解するなら、2つの理由から〔主は〕こうおっしゃっている。1つ目の理由はヒエロニムスが挙げているもので、彼〔ヒエロニムス〕は、人間が義のわざを実行するだけでは十分でなく、したくてそうすることで十分になるから、という理由である。「意志により、わたしはあなたに犠牲をささげる」云々(詩 53:8)、別の場所では、「わたしの靈魂が、神に向かい、生きている泉を渴き求める」云々(詩 41:3)。「わたしは、かの地に飢えをつかわそう。パンの飢えと、水の渴きではなく、神の言葉を聞くことへの餓え渴きを。それゆえ、欲望をもって実行する時の餓え渴き〔が1つ目の理由〕である。

もう1つの理由は、以下のようなものである。義には完全なものと不完全なものの2通りある。世では、われわれは、完全なものを持つことができない。「われわれには罪がない、とわれわれが言うなら、自らわれわれに道を踏み外させるものである」(1ヨハ 1:8)。そして「わたしたちの義すべては、いわば月経の当て布のようなものだ」(イザ 64:10)。しかし、義による欲望をわれわれはここで有することができる。そして、それゆえ、「至福だ、義に餓え渴く人々は」云々と〔主は〕おっしゃっている。そして、ピュタゴラスがなしたことと同じである。すなわち、ピュタゴラスの時代に、研究に努める者

たちは知者，すなわち知恵ある者と呼ばれていた．そして，ピュタゴラスは知者，すなわち知恵ある者と呼ばれることを欲せず，哲学者と呼ばれたいと思っていた．これは知恵を愛する者という意味である．同じく，主も，「人々が」彼〔主〕に属し，義を愛する者と呼ばれることを欲している．

そして，特殊的な義を解するなら，すなわち，人間が，各々の人に当人のものを帰させることと解するなら，「至福だ，餓える者たちは」云々と言われているのは，適切である．餓え渴きは本来，欲張り者たちに属する．他人のものを所有しようと欲する者たちは，決して満たされることはない．そこで，この餓え，それについて主がおっしゃっているそれは，これ，すなわち欲張り者たちの餓えと反対のものである．そして，主は，この義をわれわれがあえぎもとめ，強欲な人が決して満たされることがないように，この生では決して満たされることがない，ということ欲している．それゆえに，「至福だ，義に餓え渴く者たちは，彼らは満たされるだろうから」とあるのである．

428. 適切にも「満たされるだろう」ことが報酬とされており，これは第1には，永遠の直視のうちにあり，すなわち，神を本質によって見るということである．「あなたの栄光があらわになる時，満たされるだろう」(詩 16:15)とある．すなわち，ここでは，欲し求めるべきものに固くむけられている．「善きもののうちで，あなたの欲望を満たす者」(詩 102:5)，「彼の欲望は正義の人たちに与えられるだろう」(箴 10:24)<sup>2</sup>

〔満たされるという報酬は〕第2には，現世のうちにある．これには2通りある．1つのもの〔すなわち，現世的満足〕は，霊的な善のうちにある．これは，神の命令を満たすことのうちにある．「私の食物は，私をつかわし，その〔自分の〕わざを私が完成させる者の意志を，私が実行することである」(ヨブ 4:34)．そして，このことについてはアウグスティヌスが講解している．もう一方では，時間的なものの充足について受け取られる．不正な人間たちは決して満たされることがなく，自分の分際を正義そのものとして有している人間たちは，〔分を〕超えることはない．「義なる人は，自分の靈魂を使いつぶすことで満たす」(箴 13:25)．

429. かの至福は、アウグスティヌスによって、勇気のたまものをもとのものとされている。人間が正当に行為することは、勇気に関わる。また同じく、語られたことに次いで、あるものを報酬として付け加える。満たされるということは、欲望を全体的に満たすことである。

また、同じく、第 1 に、「至福だ、悲しむ者たちは」と〔主は〕おっしゃっていることに気付いてほしい。すなわち、人間は、弱くなっている時、〔自分の靈魂を〕使い尽くすことを欲しはせず、すでに満足し始めた時、欲し始めるのである。そして、靈的なもののうちでは、人間たちが罪のうちにある時、靈的な餓えを感じず、罪を捨てる時、感じるようになるという仕方〔で、欲するようになるの〕である。そして、それゆえ、その後直接に「至福だ、あわれみ深い者たちは」と〔主は〕付け加えている。あわれみのない正義は残酷であり、正義のないあわれみは、弱さの母である。そして、それゆえ、両方〔正義とあわれみ〕が結び合っているということにならねばならない。「あわれみと真理があなたに欠けることはない」云々(箴 3:3)。「あわれみと真理は、自分に逆らう」云々(詩 84:11)。

430. 「至福だ、あわれみ深い者たちは。彼らは、あわれみを得るだろうから」。あわれみ深くあることは、他の人のみじめさに痛ましい心を有することである。他者のみじめさにあわれみをわれわれが持つ時、このみじめさをわれわれは、われわれのものであるかのように考える。そして、われわれ自身のものについてわれわれは悲しみ、はねのけようと強く求める。それゆえ、あなたが真にあわれみ深いというのは、他者のみじめさをはねのけようとする時である。

そして、隣人のみじめさには、2 通りある。第 1 〔のみじめさ〕は、時間的なもののうちにある。そして、これ〔、すなわち、時間的なもののうちにあるみじめさ〕に向けてみじめな心を有しなければならない。「誰かがこの世の財を有しており、自分の兄弟が有しなければならないと見ておりながら、その内奥のものを彼〔兄弟〕には閉ざしているなら、神の愛がどうして彼のうちに留まるか」(1 ヨハ 3:17)。第 2 のもの〔みじめさ〕は、人間が、罪に

よりみじめになっているみじめさである。至福が、徳のわざのうちにあるように、本来のみじめさは悪徳のうちにある。「罪が人々をみじめにする」(箴 14:34)。そして、それゆえ、破滅しようとしている者たちに、引き返すようわれわれが忠告する時、われわれはあわれみ深い。後の箇所にはこうある。

「イエスは群衆をご覧になり、あわれみの心に動かされた」(マタ 9:36)。それゆえ、この人たち〔罪から引き返すように忠告する者〕はあわれみ深い。

431. そして、なにゆえか。「彼らはあわれみを得るだろうから」。そして、知るべきことは、神のたまものは私たちの功德を超えているということである。

「主は報いる者であり、7度もあなたに報いるだろう」。それゆえに、私たちが隣人に用いるあわれみより、主が我々に用いるあわれみは大いに大きいということになる。

このあわれみは、この生で2通りのしかたで始まる。第1には、罪からゆるされるという仕方。「あなたの審問をすべて和らげられている者」(集 35:13)。第2には、時間的な欠陥を取り除くという仕方。そのように、その太陽が昇るようにすることである。しかしながら、未来に完成されるだろうという時、すべてのみじめさが取り除かれる。すなわち、過ちも、罰も取り除かれる。「主よ、あなたのあわれみは天にある」(詩 35:6)。そして、このことが、「彼らはあわれみを得るだろうから」ということである。

432. この至福は、おもんばかりのたまものをもとのものとされる。謙虚なおもんばかりは、この世の危険のうちで、われわれがあわれみを得るということである。「敬虔さは、すべてのことに便利である」(1 テモ 4:8)、「私のおもんばかりは、かじを取られるのがよいと思う」(ダニ 4:24)。

433. ーそれゆえ、以上のように、わたしたちが悪から離れる徳のはたらきと、わたしたちが善をなす徳のはたらきとがおかれたうえで、今、わたしたちが最善のものに準備する徳のはたらきがおかれる。それゆえ、「至福だ、心が清ければ」云々と言われる。この至福は、2つのこととして成り立つ。神を見ることと、隣人を愛することと。それゆえ、まず、(1)神を見ることに関わる至福をおき、ついで、(2)隣人への愛に関わる至福をおく。これは、「至福だ、

平和を作る者たちは」云々とある個所である。

434. —それゆえ、「至福だ、心が清ければ、その人たちは神を見るだろう」と  
〔主は〕言う。

これは第1に、文字通りの問いである。すなわち、神は見られ得ないと我々は論じた。「誰も決して神を見ることはなかった」(1ヨハ4:12)。そして、たとえ現在は誰も見ないにしても、未来には見るだろうと言うことがないように、使徒はこれを取り除く。「人間のうちの何者も見ることがなく、見ることができるということもない者が、近づくことのできない光に住む」(テモ6:16)。

しかし、知るべきことは、このことに関して、さまざまな意見があることである。すなわち、ある人々は、決して神は、本質によって見られず、その透明さの輝きにおいて観られるとしていた。しかし、このことに出エジプト記の「人は我を見ることはなく、生きることもない」(出33:20)に関する『行間註解』が、2つの理由により反証する。第1に、これは聖書の權威に反する。「我々は彼を、あるがままに見るだろう」(1ヨハ3:2)。さらに、「今、われわれは鏡を通して、謎において見ているが、かの時には顔と顔を合わせてみるだろう」(1コリ13:12)。そのうえ、理性にも反する。人間の至福は人間の究極の善で、そこでその欲望は満たされて静まるが、自然本性的欲望は、結果を見ている人間が原因について探し求めるからである。それゆえ、哲学者たちの驚きもまた、哲学の起源であった。結果を見る人々は驚嘆し、そして、原因を問うたのである。ゆえに、この欲望は、最初の原因に至らない前までは満たされ静まることがない。これ〔最初の原因〕が神であり、すなわち、神の本質そのものに至らない前までは欲望は満たされ静まることはないのである。

他の人々も間違っただが、反対のことを考え余計に間違っただ。彼らは、わたしたちが精神の目で神の本質を見るだけでなく、肉体の目によっても見る、そしてキリストは肉体の目で神の本質を見ると言ったのだ。しかし、ここで言われている聖句から最初に明らかになることが適合しない。〔神の本質を肉体の目で見るのなら〕「至福だ、心が清ければ」と言わず、「至福だ、清

らかな、純粋な目を持つ者は」と言ったはずだから。それゆえ、〔神の本質を心で〕理解するということになる。〔神の本質が〕見られるのは、心によってでなければ、すなわち、知性によってでなければならない。すなわち、ここでは心〔という語〕はこのように受け取られる。「あなたの心の照らされた目」(エフェ 1:18)でも同様である。第2に、身体の感性は、その対象のうちでなければあり得ないが、かの時にはより大きな能力を有するだろうと言われるなら、言うべきことは、かの時には身体的に見ることがある、ということである。身体目は色しか見ないからだが、アウグスティヌスによれば、付帯的になら本質を見る(『神の国』22巻19章)。私が生きているものを見る時、私が、私にその命をそれによって示しているしるしを見ている限り、私たちは、私が命を見ることができるよう、神的直視の際にもそのようなことがあるだろう。新しい天と、新しい地で、栄光の身体において輝きがあるだろうのは、わたしたちは、これら〔栄光の身体〕を通して、あたかも身体目の目によってのように、神を見ると言われるからである。それゆえに、「至福だ、心が清ければ」と言われる。

しかしながら、「何者も神を決して見たことはない」ということを、3通りの意味に解ける〔読み解かれる〕。(1)把握的な直視によっても見られない。(2)身体的な目によっても見られない。(3)この世では見られない。この世の生で神を見ただろうということが、ある人に与えられたとしたら、これは、身体的な感覚を超えて、全体的に変えられ、高められたということだということになるから。そして、それゆえ、「至福だ、心が清ければ」と言われるのは、色を見る目が清められなければならないように、神を見る精神もまた清められなければならない。「心の謙虚さにおいてあの方を求めよ。あの方を試みないこの者たちによって見出される。そして、信仰をあの方に対して有する者たちに顕れる」(知 1:1)。すなわち、信仰においてこの人々の心は清められる。「信仰において、彼らの心を清める者」(使 15:9)。そして、見るということは、信仰に続く。それゆえに「この人たちは神を見るだろう」と言われる。

435. —「至福だ、心が清ければ」、すなわち、異質な・別のものの思考からの全般的な清らかさを持っている人々であるなら、これ〔心の全般的な清らかさ〕によって、彼らの心は神の聖なる神殿、すなわち、そこで神を観想し、見る場所であることになる。なぜなら、神殿は、観想すべきものによってそう言われると思われるからである。また、特殊的には、心が清い者、すなわち、肉の清さを有している者たちも至福である。霊的な観想を邪魔するものは何もないからである。肉の汚れのように、「あなたがたは平和を実現し、また聖域をなす。それなくしては何者も神を見ないだろう」(ヘブ 12:14)。

そしてそれゆえ、ある人々は、倫理徳は、特に貞潔の徳は、観想的生に進むと言っている。そして、このゆえに「至福だ、心が清いなら」というのは、旅路の直視についてのこととして理解され得る。なぜなら、正義に満ちた心を有している聖人は、身体的なはたらきによって見る他の人々より卓越したしかたで見るからである。すなわち、はたらきがより近接的であるほど、神はそれらのはたらきを通して認識される。それゆえ、正義を有する聖人たちは、愛徳と、そのたぐいのはたらきを有している。彼らは神に最も似ている人々であり、他の人々より認識をする。「飲み、食らえ。主は甘いからである」(詩 33:9)。

436. —「至福だ、平和を作る者は、神の子と呼ばれるだろうから」。ここでは、7 つ目の至福がおかれている。そして、さきほど述べたように、最善のものへと準備する徳は、2 つのものへと準備する。すなわち、神の直視と愛へと。そして、心の清さが神の直視を準備するように、平和が神の愛へと準備する。このことにおいて、神の子たちと呼ばれ、そうなるのである。そして、このようにして、「平和は」隣人への愛へと準備する。「目に見える自分の兄弟を愛さない者に、どうして、目に見えない神を愛することができようか」と言われているように(1 ヨハ 4:20)。

437. —そして、注目すべきことは、ここには、至福の 2 つの報酬がおかれている。もちろん、「至福だ、平和を作る者たちは」と「至福だ、義のために迫害を被る者たちは」ということである。そして、先行するものはすべて、こ

の2つに収斂される。そして、先行するものすべての成果である。すなわち、霊の貧しさによって、悲しみによって、馴致によってなされることは、清らかな心が得られるためでなければ、何になるのか。正義とあわれみによってなされることは、我々が平和を有するためでなければ、何になるのか。「正義の実りは平和であり、沈黙している者たちの正義の崇拜、そして、永遠にいたるまでの平穏である」

438. —それゆえに、「至福だ、平和を作る者は」ということになる。しかし、見るべきことは、平和とは何であるか、われわれはどのようにして、それ〔平和〕に至ることができるのか、ということである。

平和とは、手順が終わり安らぐことである。そして、手順とは、等しきものと等しからざる者とに対する、それぞれに各自の場所を帰する態勢づけである。それゆえ、平和は、すべてのものがその場所を目指すところにある。それゆえに、人間の精神は第一に、神に従属していなければならない。第2に、人間や動物に共通する運動と下位の力とは、人間に従属するものである。すなわち、理性によって、人間は動物に優越している。「人間を、我らの像に従い、我らの似像に従って作ろう。そして、彼〔人間〕は、海の魚、空の鳥、地のすべての獣の前に、また地にうごめく這うものすべての前に立つだろう」(創1:26)第3に、人間が平和を有するためには、他の人々に対して全体的にそのように〔平和であるように〕筋道だっていなければならない。

また、このような筋道は、聖なる人間でなければ、あり得ない。「平和が、多くのものを愛する者たちにとってあなたの名である」(詩118:165)。「不敬虔な者たちには平和はない」(イザ48:22)。すなわち、内的な平和を有することはできない。「無知による大きな戦争に生きる者たちのうちに対し、これほど大きな悪が平和を訴える」(知14:22)。そのような平和を、世は与えることができない。「世が与えられない仕方で、わたしはあなたたちに与える」(ヨハ14:27)。また、このこと全体では十分でなく、不一致のある人々の間に平和を作らねばならない。「平和へのおもんばかりに宿っている人々には喜びが伴う」(箴12:20)。

しかるに、知っておくべきことは、このような平和はここ〔この世〕では手始めであるにすぎず、完成されることはない。何者も、野獣の運動を理性にまったく従属させることはできない。「わたしは、わたしの精神の掟が、わたしの手足のうちにある他の掟が争い、罪の掟のうちに、わたしを捕虜にしているのを見る。これ〔罪の掟〕が私の手足のうちにあるものである」(ロマ 7:23)。それゆえに、真なるもの〔掟〕は永遠の生のうちにあるだろうことになる。「平和のうちに、それそのもののうちへと私は眠り、安らごう」(詩 4:9)。「神の平和はすべての感覚を超える」(フィリ 4:7)

439. 「神の子たちと呼ばれるだろうから」というのは、3種類の理由によってだ。第1のものは、神の子のつとめを彼らは有するから、というものである。この理由のゆえに、すなわち、散らされた者たちを集めるために、子は世に来たと言われる。「彼〔子〕は私たちの平和だからである」(エフェ 2:14)。「その十字架の血のうちで平和を作る者。地にある十字架の血のうちでも、天にある十字架の血のうちでも」(コロ 1:20)。第2のものは、愛徳と平和によって永遠の国に超え入るのだから、というものである。ここではすべての人が神の子と呼ばれるだろう。「見よ、いかにしてその人たちが、神の子たちに数えられるか、聖なる者たちの間では、どのようにして彼らの職務があるか」(知 5:5)。「平和のきずなで霊の一性を保持するよう気遣う者たち」(エフェ 4:3)。第3のものは、このことゆえに、人間は神に似たものになる、というのはそこには平和があり、どのような抵抗もなく、また、神には何者も抵抗しえないからである。「誰が彼〔神〕に抵抗して、平和であったか」。

440. そして、注目されるべきは、この至福は互いに上に位置し合っている。すなわち、あわれみを得ることは、満足することに優る。満足することは、自身に釣り合いが取れるもので満たされることである。しかし、あわれみは、あふれ出す。また、あわれみを受けるものは皆が皆、王によって王に会うべく派遣されるわけではない。また、王の子であることは、王に会うことに優る。

441. しかしながら、知るべきことは、これらすべてによって1つの報酬が描

き出されているということである。

しかし、なぜ、主は、このように、多くのことによってそれを言い表そうとされたのか。

言われるべきは、下位のものに分割されているものはすべて、上位のものと集められる。そして、人間に関することがらのうちにはこれらのこと〔至福に関わること？〕が分散しているのが見出され、わたしたちは感性的なもので手を引かれるがゆえに、主は、多くのもので永遠の報酬を表されたのである。

442. そして、この7つ目の至福が、知恵のたまものに適応される。なぜなら知恵は、神の子であるようにするものだからである。

また、注目すべきことは、7つ目の至福に平和がおかれていることである。あなたが7日目に安らぎを得るだろうように(創 2:2)。

443. その帰結としておかれるのが8つ目の至福であり、先行する〔至福〕すべての完全性を表すものである。人間が、それらすべてのうちで完全になるのは、苦難のゆえに何もものも見捨てない時だからである。「かまどが陶工の器を証しし、苦難による試みが義人を証しする」(集 27:8)。それゆえに、「至福だ、迫害を受ける者たちは」云々と言われる。

しかしながら、おそらく、「至福だ、平和を作る者たちは」と聞く者は、このような人たちは、迫害のゆえに至福ではないと言うだろう。迫害は平和をかき乱すか、まったく破壊するからである。しかし、確かに破壊するが、内的なものではなく、外的なものをである。「平和はあなたの法を愛する者には多い」云々(詩 118:165)。

また、迫害そのものは至福にするものではないが、その原因である。それゆえに「義のために」と言われる。「義のために何らかの迫害をあなたがうけるなら、あなたは至福だ」(1ペト 3:14)。クリソストムスによれば、「異教徒によってでもなく、信仰のためにでもなく、義のためにと〔ペトロは〕言っているのだ」とのことである。

- <sup>1</sup> テキストに倣い、テキストの他の節を参照すべき際は、以下も含め参照すべき節番号を本文中の形で記載する。
- <sup>2</sup> テキストでは(箴 21)、すなわち『箴言』21章とされているが誤り。相当する聖句は、少なくとも現行のヴルガータ訳聖書の『箴言』21章には存在しない。